「戦争」と「当たり前」

今年度、都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭に参加させていただくこととなりました。このことを機に、私は「戦争の悲惨さ」と「当たり前の価値観」について改めて考えました。

今現在、私たちが住むこの都城市は、戦争はなく平和です。当たり前のように、学校に通い、当たり前のように友達と遊んだりすることが出来ます。もし、体調が悪くなれば病院に行き、十分な治療を受けることができます。しかし、今と昔では「当たり前の価値観」が違うことに気付きました。

１９４５年４月６日から７月１日にかけ、日本軍は、敵艦に体当たりする攻撃、いわゆる「特攻」を行いました。出撃した７９名の特攻隊員は、都城へ戻ってくることはなかったそうです。その、特攻隊員の最後の言葉は、「いつまでも、いつまでもお元気で。」だったと言われています。今の私たちは、家から１人旅立つ時に、死を覚悟することは全くありません。それが、当たり前のことです。そんな、「当たり前の価値観」の違いを私たちは考えていかなければなりません。

同年、８月６日、広島に原子爆弾が投下されました。死者は、１４万人にも及び、その原因として爆風による外傷、放射線障害、二次的な火災による熱傷があると言われています。また、空襲は、広島だけでなく、ここ、都城にも繰り返されました。人々の懸命な消火活動の妨害のために、機銃掃射を繰り返す攻撃まで行われ、５６人が犠牲になりました。この時、日本は罪なき人を殺された被害国です。しかし戦争とは、同時に諸外国の罪なき人の命をも奪っているのです。このように、同じ世界の中で生きている人間どうし殺し合う戦争は、もう起きてはならないことだと考えます。

戦争から８０年が経った今、イスラエルとガザの間で武力衝突が生じています。この、二つの地域の人々は、私たちにとって当たり前の生活が、今でもできていません。また、それ以外の国々や地域でも紛争や侵略が行われている状況があります。私は、一刻も早く、世界の人々が平和に暮らしてほしいと思っています。そのために、今、私たちにできることを理解して、実行すること、戦争の悲惨さ、残酷さを、今一度認識することが重要であると考えます。

本日、この式典に参加させていただくに当たり、不戦の誓いを新たにし、戦争の惨禍を繰り返すことのないよう、世界の恒久平和の確立に全力を尽くすことを改めて誓います。戦没者の御霊の安らかならんことを、そして、ご遺族の皆様のご健勝をお祈りして、平和へのメッセージといたします。

都城市立沖水中学校
生徒代表　２年　平田　陽翔